

### 第3 問題作成部会の見解

#### 地学基礎

##### 1 出題教科・科目の問題作成の方針（再掲）

日常生活や社会との関連を考慮し、科学的な事物・現象に関する基本的な概念や原理・法則などの理解と、それらを活用して科学的に探究を進める過程についての理解などを重視する。問題の作成に当たっては、身近な課題等について科学的に探究する問題や、得られたデータを整理する過程などにおいて数学的な手法を用いる問題などを含めて検討する。

##### 2 各問題の出題意図と解答結果

「地学基礎」では、学習指導要領に基づいて編集された高等学校用教科書「地学基礎」に準拠し、また日常生活や社会と関わる面を含む「地学基礎」という位置づけに鑑み、基礎的な学習の到達度を適切に判定できる問題を目指した。出題範囲は、学習指導要領にある「(1) 宇宙における地球」と「(2) 変動する地球」の二大項目に関連する内容に関して、特定の分野に偏らないように留意した。そして、第4問では様々な資源に関して問うことにより、昨年同様に地学と実社会との関わりを意識させることを目指した。問題構成は全問必答で大問数4問とし、小問は第1問が6問、その他では各々2～4問として、昨年までと同様に15問とした。問題作成に当たっては、従来の基本方針と同様に、教科書に記載されている事項を基礎とし、教科書の範囲を超えないように配慮した。

また、共通テストの問題作成方針として、科学的な思考や判断を測る設問に重きをおいたが、限られた時間内に解答できるように、知識を活用する問題、知識の理解を問う問題も適宜組み合わせで構成した。特に図から必要な情報を読み取る力や、思考する力、総合する力を必要とする問題に重きをおいた。

第1問A 地球の形状と活動に関連した出題である。問1は、エラトステネスが地球の大きさを推定した方法にならって、離れた場所に住む高校生が協力して地球の大きさを実測することを想定した簡単な計算問題である。また問2は、プレート境界と地震・火山の分布との関係に関する知識を問う標準的な問題である。両問ともに識別力は高かった。

第1問B 問3は鍵層に適している地層の性質を問う問題である。鍵層の概念は広く扱われている題材であり、正答率は高かった。問4は地層の対比の意味を問う問題である。年代対比の概念について理解している必要があり、正答率は平均的で識別力は高かった。

第1問C 岩石と火山についての理解や思考する力を問う問題である。問5は、深成岩の顕微鏡観察による鉱物の形から晶出順序を問うた。晶出順序を逆に理解していると思われる誤答もみられたが、正答率は比較的高く、識別率も高かった。問6は、言葉つなぎにより自分の理解を確認するという方法を用いながら、火山の特徴について問う問題であった。これまでにあまりない傾向の出題であったが、基礎的な知識があれば問題なく正解にたどり着いたと思われる、正答率は高く識別力もあった。

第2問A 地上天気図から高気圧の規模と移動速度を読み取り、高気圧に覆われているときの特徴を理解しているかを問う問題である。難易度は適切であり、識別力も高かった。

第2問B 海面水温の図を参考に黒潮の流路を判断する問題である。黒潮の基本的知識を基に、図を読み取る力を問う問題である。正答率は中程度であり、識別力も高かった。

第3問 メシエ天体をキーワードとして、宇宙の諸天体の性質や構造についての理解を問う問題。問1では恒星や星団・星雲に関する知識を確認したが、まずまずの正答率であった。問2は星

雲が輝いて見える理由を問う問題で、基本的な知識をもとにした考察を求める問題である。正答率は高かった。問3は黒点が黒く見える理由を問う問題で、知識を問うものである。非常に高い正答率であった。問4は銀河系に関する基礎知識と、天の川とM31の相対的な位置関係を問う問題で、思考する力を問う問題である。正答率はまずまずであった。各問の識別力は、いずれも良好であった。

第4問 問1は火山のもたらす恵みについて知識を問うた。正答率は高く、識別力は中程度であった。問2は、石灰岩についての基礎的な知識を問う問題であり、正しく理解していれば問題なく正答にたどり着けたと思われる。正答率(65%)は標準並で、識別力は十分であった。問3は自然の恵みの一つとしての水資源に関連し降水の基本知識を問う問題である。誤った記述の項目を問うていて、梅雨前線、台風、温帯低気圧、冬の季節風の基礎知識があれば、容易に解答できた。正答率は高く、かつ識別力もあった。

### 3 出題に対する反響・意見等についての見解

高等学校教科担当教員(以下「高等学校教員」という。)からは、基礎的な知識を問う問題や計算問題など様々な出題がなされ、特に図を用いた出題の幾つかは思考力・判断力・表現力等を必要とする工夫された良問であると評価された。なお、出題内容や出題範囲は、ほぼ教科書や学習指導要領に準拠しているが、幾つかについては「地学基礎」の範囲をやや逸脱しているとの指摘もあった。また、全体としての分量は妥当で、配点も適切であったとし、難易度は全体として昨年度と同程度であるとされた。これらの御意見を参考に、今後も設問の設定を工夫することなどして、受験者にとって不利益にならないよう配慮したい。

日本地学教育学会(以下「地学教育学会」という。)からは、探究活動などを通じた、日々の学習活動を意識した出題形式が多くみられると評価された。また、難易度が高くならないように工夫され、昨年度に比べてもやや易化し、共通テストとしての難易度は適正であったとの評価も得た。今後も難易度に注意しながら共通テストの作成方針に沿った問題作成に努めたい。個々の問題に関する意見等についての見解を、以下に述べる。

第1問A 問1について、高等学校教員・地学教育学会ともに、情報を読み取る力が必要な良問との評価であった。地球全周の値を暗記していると、計算せずに文章のみから正答できるとの指摘もあった。問2について、地学教育学会より、使用教科書ごとの表記の違いに配慮されているとの評価があった。なお、イとウの組合せで解答が確定できてしまうため、エの選択肢の存在意味が薄れているとの指摘もあった。

第1問B 問3については、地学教育学会からは鍵層の条件を確認する基礎的な知識問題であるとの評価であった。問4については、高等学校教員からは鍵層の理解を確かめる良問との評価であった。地学教育学会からは、地層の対比に関する知識と思考力を問う問題で工夫があるとの評価であった。今後も問題の作成に当たり工夫を重ねたい。

第1問C 問5では、深成岩をつくる鉱物の晶出順序を問うた。平均点は高く、識別率も高かった。高等学校教員からは指摘がなかった。地学教育学会からは、等粒状組織の観察で重要な自形・多形の判別と、その晶出順序を組み合わせており、図も分かりやすいとの評価を得た。一方、鉱物名から深成岩の名称を特定させる問題でもよかったとの指摘もあり、今後の参考にしたい。問6は、火山について生徒が自分で描いた図から、自分の認識を確認する学習方法を想定し出題した。識別率は高く、平均点はかなり高かった。高等学校教員からは指摘がなかった。地学教育学会からは「探究活動を想定し、コンセプトマップを取り入れた工夫は評価できる。ただし、無理に出題形式にこだわる必要性は感じない。」という評価を得た。また、「酸性岩・塩基性岩」の表記の教科書もあるので、これを併記した記述を要するとの指摘もあり、今後の

問題作成に当たり留意したい。

第2問A 天気図を読み解く問題である。落ち着いて解答すれば解ける標準的な問題との意見があった。また高等学校教員から、「高気圧による晴天」を扱った点が目新しいという意見があった。一方、天気図をより気象学的に扱う出題内容であると良かったという指摘があった。

第2問B 海面水温の図を参考に黒潮の流路を判断する問題である。高等学校教員からは、文と図を基に流路を推定する工夫された問題との評価を得た。地学教育学会から指摘のあった教科書による黒潮流路の扱いの違いについては、黒潮の基礎的な知識と問題の難易度を踏まえながら今後の留意事項としたい。

第3問 問1は、会話文と天体写真から星団と星雲について考察する基本的な知識問題であると評価された。モノクロ写真も細部まで明瞭で良いというコメントもいただいた。一方で、写真と星の年齢との関連性が分かりにくいという指摘もあったので、今後の作題に当たって留意したい。問2は、星雲に関する知識問題であったが、幾つかの選択肢が曖昧であるとのコメントもあったので、今後の作題に当たって留意したい。問3は、黒点と磁力線の関係についての知識問題だが、基礎知識だけで解答可能になるように工夫されていると評価された。一方で会話と設問内容に飛躍があるという指摘もあったので、今後の作題に当たって留意したい。問4は、銀河系に関する基本的な知識と空間把握を問う問題であり、暗記だけでは解答できない点と難易度も適切であると評価された。正答率は5割強から8割強にわたっており、「地学基礎」の問題として妥当であったと思われる。

第4問 問1は、火山の災害ではなく恵みに着目した点が高く評価された。問2では、岩石サイクルに関する基本的な知識問題として石灰岩をとり上げた。地学教育学会からは、各選択肢の説明文も詳細で分かりやすく、日本が自給可能な石灰岩を扱った点も良いとの好評を得た。問3は、水資源に関連し、降水に関する知識を問う問題である。地学教育学会からは、SDGsとも絡めた出題意図について高い評価を受けることができた。加えて、注意点を下線で示したこと、及び各選択肢の記述の分かりやすさについても高い評価を受けた。全般的に分野横断型の出題に対しておおむね高い評価をいただいているので、今後もこの方向を維持し、出題に取り組みたい。

#### 4 ま と め

本年度の試験問題は、共通テストが目指す方向に沿ったもので、その構成や分量、難易度はほぼ妥当であったと判断している。昨年度のとめにおいて、分野間のバランスを考慮するとともに「災害・環境」などに関する設問を検討するとしたのを受けて、本年度は「資源」に関して出題をした。また、受験者が解答しやすいように、文章量や文章表現などに留意するよう努力としたが、この点についてもある程度達成できたと思われる。更に、以下に示す点に留意しながら、今後ともより良い試験問題の作成に取り組んで、社会に向かって質の高いメッセージを発信していきたい。

- (1) 個々の問題の難易度とそれらの組合せについて一層検討し、今年度と同様に適切な平均点を確保し、同時に識別力の高い問題を作成することに努める。
- (2) 教科書に記述されている基礎的・基本的な知識をベースにして、思考力・判断力・表現力等や計算力も問う問題をバランスよく出題する。
- (3) 設問の文章や図表等から必要な情報を読み取る能力や思考力・判断力・表現力等を問う問題を作ることに努める。
- (4) 「地学基礎」が広い範囲を扱っていることから、分野間のバランスのよい出題をする一方、地学で扱う事項と日常生活との関連を意識した設問、分野横断的な設問も引き続き検討する。
- (5) 受験者が試験時間内に解答ができるよう問題数や文章量、ページ数を設定するように努める。
- (6) 設問の文章表現や用いる用語は分かりやすいものを使い、紛れがないようにより一層努力する。

# 地 学

## 1 出題教科・科目の問題作成の方針（再掲）

科学の基本的な概念や原理・法則に関する深い理解を基に、基礎を付した科目との関連を考慮しながら、自然の事物・現象の中から本質的な情報を見いだしたり、課題の解決に向けて主体的に考察・推論したりするなど、科学的に探究する過程を重視する。問題の作成に当たっては、受験者にとって既知ではないものも含めた資料等に示された事物・現象を分析的・総合的に考察する力を問う問題や、観察、実験、調査の結果などを数学的な手法を活用して分析し解釈する力を問う問題などとともに、科学的な事物・現象に係る基本的な概念や原理・法則などの理解を問う問題を含めて検討する。

なお、センター試験で出題されてきた理科の選択問題については、設定しないこととする。

## 2 各問題の出題意図と解答結果

「地学」では、学習指導要領及びそれに基づいて編集された高等学校用教科書「地学」に準拠し、当該分野の学習の到達度や学習した知識を総合して考える能力を適切に判定できる問題を目指した。出題範囲は、学習指導要領にある「(1) 地球の概観」「(2) 地球の活動と歴史」「(3) 地球の大気と海洋」及び「(4) 宇宙の構造」の四つの大項目に関連する内容で、特定の分野に偏らないように留意した。問題構成は、従来と同様に全て必答問題で大問数5問としたが、十分な時間問題に取り組めるように小問数を3問減らし27問とした。そして、問題作成に当たっては、従来の基本方針と同様に、教科書に記載されている事項を基礎とし、その範囲を超えないように配慮した。なお、共通テストの目的を考慮して、地学の様々な事象を三次元と二次元情報の両面から問う問題を出題した。

第1問 地学分野で重要な二次元・三次元間の情報のやりとりに関する問題を集めた総合問題である。問1は、地震の震源分布から太平洋プレートの沈み込みの形状を読み取る問題である。基本的とは言え、浅部では沈み込みに伴わない地震も発生するという知識も要求されるため、識別力の高い問題となったと思われる。問2は、鉱物の偏光顕微鏡観察についての理解を問うた。正答率は全問の平均点よりも高く、識別力も良好であった。鉱物の外形に関する基本的な学習項目を理解していれば、偏光顕微鏡観察のスケッチから三次元的な鉱物の外形と鉱物名を推測できたと考えられる。問3は、模式的な谷地形に現れる地層の分布の読み取りから、走向・傾斜や地形との関係を三次元的に理解できているかを問うた。正答率は5割程度で識別力は高かった。問4では、温帯低気圧の鉛直断面における気温と前線（面）の基本構造についての理解を問うた。基礎的な問題であり、高い正答率を示した。識別力も高かった。問5は、見かけの等級、絶対等級、距離の関係を使って、二次元に見える星座が恒星の三次元分布の射影であることをなじみのあるオリオン座を例に問うた。正答率は平均的で、等級と距離の関係について理解できていた。また、識別力は高かった。

第2問A 固体地球の構造に関する問題である。問1は地球表面の高度分布が二極化することと大陸地殻・海洋地殻の密度差との関係の理解を問う問題である。問2はP波とS波の到達時間差と震源距離の関係の関係を問う問題である。正答率は5割強で識別力は高かった。

第2問B プレートテクトニクスとマグマの発生に関する問題である。問3は海嶺とトランスフォーム断層の特徴について、断層運動の観点から理解度を問うた。識別力は高かった。また、問4は火山前線からの距離と火山噴出物の量の関係についての理解を問うた。図を読み取る力を要するため、正答率は低かったが、識別力は良好であった。問5は中央海嶺と海溝における

マグマの発生条件を問うた。知識があれば容易な問題であるが、正答率は平均よりもやや低かった。識別力は良好であった。

第3問A マグマの化学組成が変化する過程についての理解を問う問題である。問1では、思考実験を通じ、マグマ混合に伴う化学組成と斑晶鉱物の変化に関する理解を問うた。正答率は全体平均と同程度であるが、火山岩に含まれる鉱物を正しく理解していれば問題なく正答にたどり着いたと思われる、識別率も高かった。問2は、結晶分化作用についての基本的な内容を問う問題であり、正答率は標準的で、識別率も高かった。

第3問B 問3では、複数の示準化石を比較して、特定の化石が産出する可能性のある層準を問うた。正答率はあまり高くなかったが、識別力は良好であった。問4では、図示された褶曲と断層の種類を問うた。正答率は中程度であったが、識別力は良好であった。

第3問C 問5では、最古の人類の出現を1月1日としたカレンダー上で、ホモ・サピエンスの出現時期を問うた。正答率、識別力ともにあまり高くなかった。問6では、人類が出現した時代に起きた事象に関する基本的な知識を問うた。正答率、識別力ともに良好であった。

第4問A 地球大気のうち、高度10–50kmの範囲の大気について問う問題である。問1は、この範囲の大気圏の名称を問う基礎的な問題であり、正答率は高い。問2は、この成層圏の気温の季節変化2年分について、その変化の違いをグラフから読み取って、オゾン層の破壊の発生を考察する問題である。上位群の識別はできたが、正答率は低かった。

第4問B 海洋表層の大規模循環流についての問題である。問3では、地衡流の理解を問うた。問4はアイソスタシーの概念を用いて、海水面の高さから海水密度の鉛直断面を推定する問題であった。また、問5では西岸強化の基本的な知識を問うた。正答率はいずれの問題も中程度であった。特に問4の正答率が低く、これはアイソスタシーの理解不足が原因と思われる。

第5問A 問1では、惑星の運動に関する基本的な理解及び図を読み取って計算ができるかを問うた。問2では惑星の軌道と見え方に関する基本的な理解と図を読み取れるかを問い、更に問3ではそれらに加え、基本的な事項をしっかりと押さえて、教科書などで標準的に扱われるわけではない初見の状況に応用できるかを問うた。問1は正答率が5割あまり、問2、問3は正答率が4割あまりで、どの問も、成績上位者となるにつれて正答率が確実に上がるなど、識別力があった。

第5問B 問4は太陽活動関連用語の知識問題で、教科書にほぼ同様の記述があり正答率は高かった。問5は天球に関して中学理科の知識も併せて総合的な判断が必要であり、正答率は低かったが識別力は良好であった。問6は星団のHR図を扱い、教科書の図では星団の全ての恒星を含むのに対し、実際の観測では明るい恒星のデータしか得られないことが多く、本問は観測できた恒星だけで作図した設定である。星団の性質について本質的な理解を問うており、正答率は低かったが、中上位群の識別力は高かった。

### 3 出題に対する反響・意見等についての見解

高等学校教員からは、内容に関しては基本的な知識に加え、探究活動や観察、実験、野外実習などを題材として、また図表の読み取りなどから、思考力・判断力・表現力等や数学的処理能力を問う問題を課しており、共通テストの作成方針を踏まえて適切であったと評価された。また、一昨年・昨年に続き出題された総合問題(第1問)は地学の特性を意識させようとするメッセージ性があり、評価すべき形態との言葉をいただいた。全体として、思考力・判断力・表現力等を必要とする設問の割合が増加したが、問題数が減少したため、全体としての分量は問題文の長さや量を含めて適切であったとされた。今後も、共通テストの指針に添い、なおかつ受験者が理解しやすい設問設定を

心掛けたい。

一方、地学教育学会からは、全体的に基礎的な問題が幅広い分野からまんべんなく出題されており、全体の難易度は標準的で共通テストとして妥当であるとの評価をいただいた。また、分野によっては、「地学」で扱う範囲・水準を超えないように留意してほしいとの意見もいただいた。今後も、これらの御意見も参考に、作問を行いたい。

第1問 地学教育学会からは、「地震と地殻変動に関する問題」であるとの評価を受けた。高等学校教員からは、「震源の深さの分布から沈み込むプレート上面の形状を考察する問題」であるとの評価を受けた。共に、暗記ではなく図を読み取る実際的な問題で、良問であるとの講評であった。問2は、高等学校教員からは空間認識と鉱物に関する知識を融合した良問であるとの評価をいただき、地学教育学会からは単なる暗記問題ではなく、図から鉱物の三次元的形状を判断する点を評価いただいた。問3は走向・傾斜や地形との関係を正しく理解できているかを問う問題である。高等学校教員からは特に意見はなかったが、地学教育学会からは、図が幾何学的な模式図であることと、リード文に「谷底に河川が流れている」と記載されていることで、受験者は判断しやすかったと思われると評価された。問4は、温帯低気圧の気塊の分布と温度の鉛直構造を組み合わせた問題である。高等学校教員からは、教科書の別々の部分の説明を統合して理解する必要性を問うた問題と解釈できるとのコメントがあった。地学教育学会からは、前線面を厚みのある構造で表現したことが工夫されているとの評価を得た。問5は、見かけの等級と絶対等級を示した図から恒星までの距離を問う問題であった。高等学校教員からは、グラフから値を読ませることに工夫があったとの評価であった。また、地学教育学会からも、図のグラフは新鮮な表現で読解力、思考力が求められるとの評価があり、図を使った思考を問う問題として適切であったと考える。

第2問A 固体地球及びマグマの発生に関する問題である。問1は、地球表面の高度分布（陸地の高さ・海底の深さ）の理解を問う問題で、地学教育学会から、グラフから考察させる点が目新しいとの評価を得た。問2は地震波形を読み取る問題である。地学教育学会から、基本的な思考問題との評価を受けた。P波到着時を揃え、PS時間を読み取りやすくする工夫を評価された。

第2問B プレートテクトニクスとマグマの発生に関する理解を問うた。問3について、地学教育学会から、トランスフォーム断層の横ずれ方向の理解を問うた点を評価いただいた。また高等学校教員から、横ずれ断層の種別判定で差が出たと推察されるとの評価を受けた。問4は、火山前線に関する基本的な知識を問う問題である。高等学校教員からは、知識を問う問題ではあるが、図で出題されており、出題の仕方に工夫が感じられるとの評価を頂いた。ただし、正答率は低く、高等学校教員と地学教育学会の両方から、正答の選択肢の図に火山前線より海溝側に火山噴出物が全くないことに戸惑った受験者も多かったのではないかと指摘をいただいた。「火山の位置にその噴出物の体積を示す」と明記しているため問題はないが、コメントは今後の参考にしたい。

第3問A マグマ混合を題材とした出題である。高等学校教員及び地学教育学会から、思考実験という形での出題は目新しく、文章の読解力と思考力が問われるように出題の仕方を工夫した問題であるとの評価をいただいた。問1については、高等学校教員からマグマ混合を題材にしたことも工夫が感じられるとの好意的な意見もいただいている。その一方で地学教育学会からは、単純な知識問題にならないような図の使用についての提案があった。正答率は平均的であり、受験者は持っている知識を生かして思考することにより正答にたどり着けていると考えられるが、御指摘の点については今後の問題作成に当たって留意したい。問2は、基本的な問題

であるとの評価であり，正答率も標準的であった。

第3問B 地質断面図を基に示準化石と地質構造に関する基本的な知識と理解力を問うた。問3，問4に関しては，地学教育学会からは，単に知識を問うだけでない，図を用いた思考問題であるとの評価を得た。

第3問Cは，人類の進化史に関する知識を問うた。問5に関しては，高等学校教員，地学教育学会双方から，人類史に焦点を当てたカレンダー作成は新規性があるとの評価を得た。高等学校教員からは，細かい年代の記憶が必要であるとの指摘があり，今後は留意したい。問6は，地学教育学会から基本的な理解を問う良問であると評価された。

第4問A 高等学校教員からは，北極のオゾンホールを扱った新しい傾向の問題であり，問題文の内容理解，グラフの読み取りを関連させる良問であると評価を得た。正答率は全体として高く，識別力も良好だった。地学教育学会からは，オゾンホール生成の仕組みの理解が必要であるとの指摘があり，今後の課題としたい。

第4問B 海洋表層の大規模循環に関する問題である。問3は，地学教育学会から，エクマン輸送についての標準的な知識問題であるとの評価を得た。問4は，地学教育学会から，アイソスタシーの原理を応用して海水の密度分布を問う思考問題，高等学校教員からは，他分野で学んだアイソスタシーの考え方を海洋の盛り上がり置き換えて考える工夫された問題，との評価を得た。ただし，この問4は正答率がやや低く，これはアイソスタシーの基本的な理解不足が原因と思われる。問5は地学教育学会から，西岸強化の原理に関する理解を問う問題だが，片方の教科書では本文ではなく，参考として掲載されているとの指摘を受けたものの，識別力は高く，問題ないと判断される。

第5問A 高等学校教員からは，地球以外の惑星から天体観測をするという設定が目新しく教科書で学んだことをもとに考察する問題になっていると高い評価をいただいた。問1は，地球と他の惑星ではなく火星と木星に関する工夫された問題であり，またグラフから数値を読み取らせる形式になっていると評価していただいた。地学教育学会からも，斬新な問題設定で良問との評価をいただくとともに，両者の会合周期は火星の公転周期に近づくことに気付くか，数値を適当な値に丸めて要領よく概算する技能が求められるとの指摘をいただいた。問2については，高等学校教員からも地学教育学会からも，地球を「内惑星」に見立て火星から見たときの最大離角を求める設定とする工夫や，図の正確さや正弦の数値の記載を評価していただいた。問3は，火星から観測する年周視差および年周光行差を考える問題にしており工夫されている良問だ，年周視差と年周光行差は受験者が理解しにくい項目だが，この問題は丁寧な惑星間比較で誘導してむしろ分かりやすく工夫されていると高く評価いただいた。以上の好意的評価にも表れているとおり，全体的に良問であったと考えている。

第5問B 地球や天体の動きや性質に関する知識や理解を問う問題である。問4・問5について，高等学校教員，地学教育学会双方から，全体的に基本的な内容であるという評価であったが，問5は誤った文を選ばせる形式のため正答率が下がる，また一部は教科書に詳しい記述がないのではないかと，とのコメントもあった。実際，問5は出題形式による難化に加えて中学理科の内容を含むために，正答率が低くなったと思われる。問6は星団について恒星の年齢と明るさおよび色を関連させる問題である。正答率は低かったが，高等学校教員，地学教育学会双方から，本質的な思考を問う良問であるとの高い評価をいただいた。問4～6は識別力のある問題で，全体的に良問であったと考えられる。

## 4 ま と め

本年度は、「共通テストとして適切な問題構成であると同時に、昨年度に続きおおむね適切な難易度に」であったと考えられる。今後も、難易度・分量・基本的な知識を問う問題と思考力・判断力・表現力等を問う問題のバランス等に配慮しつつ、学習者の関心・興味を高めるような良問の出題を目指したい。そして、問う内容のレベルを考慮しながら、設問の仕方を工夫することで適正な正答率を維持する試みを今後とも継続する必要がある。自然災害や地球環境、資源問題などの観点からも地学分野の知識が大変重要であるにもかかわらず、「地学」の受験者数が理科全体からみると非常に少ないという状況は続いている。各方面からいただいている意見・要望も踏まえて、以下に示す点に特に留意し、更に地学への関心・興味を高めるような良問の作成に努めたい。

- (1) 設問の中に思考過程のヒントになり得る説明などを加えて、熟考すれば正答にたどり着けるような良問や選択肢に紛れがないよう工夫を施す。
- (2) 学習指導要領に示された「地学」の内容、範囲内から出題するとともに、必要に応じて設問中に補足説明を挿入するなど、出題を工夫する。
- (3) 平均的な学力を持つ受験者が、解答時間内に全問題に十分取り組めるような問題設定や問題数とする。また、深く思考させる問題と平易な問題とのバランスを取った問題構成に努める。
- (4) 教科書に記載されている基本的・基礎的な知識問題から思考力・判断力・表現力等を問う問題までバランス良く出題する。
- (5) 地学の各分野相互の関係を意識した分野横断的な設問や総合問題、そして「災害・環境・資源など」社会や日常生活と関連した設問の作成を継続する。